

演 題 番 号 : 5

演 題 名 : Ahmics-VMD CT ポジショナー使用経験及び導入施設の現状

発 表 者 氏 名 : ○谷浦督規¹⁾ 山添比奈子²⁾ 南埜紀雄³⁾ 赤木陽介⁴⁾ 谷浦直美¹⁾

発 表 者 所 属 : 1) 谷浦動物病院・広島 2) キャミックひがし東京・東京 3) ペットコミュニケーションズ株式会社
4) 富士アイ, エム, シー株式会社

1. はじめに: これまで当院が臨床応用してきた無麻酔 CT ポジショナーを 2017 年 4 月から動物用医療機器としてペットコミュニケーションズから Ahmics-VMD CT ポジショナー (国内および中国・アメリカ・ヨーロッパ特許出願中) の販売を開始した。今回は不特定多数の施設が使用しても、ある一定の画像データの精度が必要であるためのコツや、検査従事者の CT 室内からの検査時の退避状況等を紹介する。また導入施設を含めて約 130 症例からの臨床データより、CT ポジショナーのアンケート結果と臨床画像を報告する。
2. 材料および方法: Optima CT660 128 スライス (GE), Optima CT660 Advance 128 スライス, Alexion16MSCT. Ahmics-VMD CT ポジショナー (富合評価などのアンケートを実施した)。
3. 成 績: 四肢牽引ベルトの装着からスカウトまでと検査所要時間は約 15 秒であった。スカウトの X,Y,Z 軸の評価は麻酔下と同等であった。四肢ベルトの滑落が約 3% でみられた。画質は麻酔下と同等であった。造影剤の重篤な副作用は見られなかった。他院の 16 列の DICOM データ (10 症例) からの診断支援画像も良好で、全ての症例で CT ポジショナーの必要ありと評価した。
4. 考 察: 無麻酔 CT ではテーブルの移動, 回転音などによる不安を抑えるために、当院ではワイヤレスマイクによる声掛けをしている。当院も他施設でも、麻酔下と同等の画像が得られのに十分な不動化が可能であると思われた。検査所要時間は経験値に左右されると思われた。難しいようであれば軽く鎮静することで薬容量も 1/3 程度にする事が可能である。CT ポジショナーは検査時も強く拘束しないので、重症例にも使用可能である。麻酔のリスクを考え検査を躊躇していた飼い主、特に重篤や高齢動物でも安心できる検査となり、獣医師側にとっても検査の可能性が増え、特に診断や術前シミュレーションや治療に反映することができると思われた。他施設での使用評価も高く、装着も難しくないので、世界初の無麻酔 CT 対応のポジショナーは今後獣医療での診断治療に貢献できると思われる。

演 題 番 号 : 6

演 題 名 : 頭蓋底下の異物除去に対して CT を用いた診断から治療方法を決定できた猫の一例

発 表 者 氏 名 : ○谷浦督規¹⁾, 谷浦直美¹⁾

発 表 者 所 属 : 1) 谷浦動物病院・広島県

1. はじめに: 我々の日常診療の中で異物誤飲の症例は少なくない。しかし飼主が気付かない場合は、消化器症状がなければ、診断リストから除外されることがある。今回飼主が気付かず、嘔吐もなく、精査目的の CT 検査より、口蓋から環椎翼にかけて 2 つの異物を発見した猫の一症例に遭遇し、CT での存在診断及び摘出ルートサポートにより治療できた概要を報告する。
2. 材料および方法: 雑種猫, 3 歳, 去勢オス, 6.86 kg. 食欲廃絶と頻呼吸で来院。血液検査および X 線検査を実施したが、原因が確定できず、対処療法を実施したが改善せず、精査のため無麻酔 CT 検査を実施し、異物を発見した。内視鏡で口腔内の確認と一部の異物を除去、その後 CT 下で残りを除去した。CT 装置は Optima CT660 128 スライス (GE), 造影剤注入装置は A-300(Nemoto) を使用。WS は雷神 (AZE), VAZE (ペットコミュニケーションズ) を使用した。
3. 成 績: 血液検査では脱水, 白血球数増多, 高コレステロール血症, 過血糖以外に、著変はなく、X 線検査も胸部、腹部とも特に異常はなかった。単純 CT 検査では鼓室包から環椎翼に周囲より高吸収の異物が確認された。ダイナミック CT では単純 CT の異物の周囲は低吸収で、その周囲は増強されていた。3DCT では口腔内から鼓室包下、さらに環椎翼にかけて 2 つの円柱状の異物を描出した。内視鏡下では硬口蓋の陥没部位から長い円柱状物を除去した。小さな破片は内視鏡では解らず、次に CT 下での異物摘出を実施した。開口部からカテーテルを挿入し、CT 撮像し計測し、先端の細い器具を挿入後、3DCT で立体的な方向を確認しながら 1.5cm の断片を摘出した。予後は良好で翌日から自力採食が可能になった。
4. 考 察: 過去に人医療で割り箸事故がある。子供が割り箸で喉を突いたと母親が説明したが、割り箸が発見できず死亡した。死後 CT 検査でも解らず 司法解剖で頭蓋底から小脳まで貫通した 7.6cm の割り箸の断片が確認された。本症例は誤飲を飼主が気付かなかったが、CT 検査で 3cm と 1.5cm の箸の先端を 3DCT で正確に描出でき、貫通ルートから摘出した。造影 CT 撮像では、造影で異物検出が困難な場合があり、単純 CT は重要である。本例は偶然発見された異物に対し、CT 装置を診断だけでなく、治療ガイドとして活用したこれまで報告のない希な症例である。